

「幫間でもして御座つたのだすか」

「イ、ヤ、乞食の頭の家で居候をしてた」

「アノ、乞食の家で」

「そうや、小遣錢が無い様になると、拍子木を打つて、他所の家の表に立つて（節を付け）トコントンコ、トンサクナ、藝題盡しや紙盡し、紙にも色々有馬紙、私の様な薄い美濃紙は、一錢二錢はふうぢやの塵紙、トコントンコ、とやるねん、一寸錢になるで」

「モン若旦那、何を仰しやる、大きな聲を出してみつともなう御座ります」

「それはそうと、お前此の間卵の日に、住吉へ詣つてやつたやろ」

「ヘイ、友達に誘はれまして……」

「私あの時に、鳥居の前でお前に逢ふたで」

「そうだすかいな」

「お前、あの時立派な羽織を着て四角張つて居たな、私餘つ程徳兵衛と云ひたかつたけども、斯んな乞食姿で言葉を掛けたら、お前が恥をかくやろと思ふて私黙つて居た、どうぞ一文頂だかしてと云ふと、附くなどお前が睨んだ、お前が睨んだら怖いなア、附くなどお前が云ふたとて、狐狸ぢやないわいな、と云ふたやろ」

「へ、エ、あれ貴方でしたんか、一寸も存じまへんで失禮致しました。若旦那、貴方が動きなはると、手や首筋からボロ／＼粉が落ますな、風呂へ何時お這りになりました」

「風呂は一年半程這入つた事がない、何時も川へ這入つて洗ふねん」

「まるで烏みたいな、お腹も空いて居りますやろ」

「フン、二日前から何も食べて居らんや」

「お腹の空いたん辛抱して、風呂へ行つて、散髪を仕て髭でも剃つておいでやす、其の間に温い物でも拵へて置ます」

「濟んな、そんなら風呂へ行つて来るで」

「ハイ若旦那、茲に石鹼が御座ります、どうぞ御緩り御出で遊ばせ……」

作次郎は表へ飛び出しますと、暫くすると風呂へ這入りまして、スツクリ垢を落し、散髪を仕まして髭も剃つたので人間らしいになりました。

「徳兵衛、今歸つた」

「お歸り、サアお茶を入れて御座ります、一ツお召りやす」

「ア、結構々々、え、心持になつた、徳兵衛、矢ツ張り川より風呂の方がえゝな」

「川と風呂と一緒にありますかいな」